



地元・加西市を走る北条鉄道。ローカル線独特ののんびりした車内の雰囲気と窓からのぞく自然豊かな景色が魅力

コラム 「きのうきょう」

言葉について考える

文&写真 学生記者 西村卓真（経済学部3年）

長い旅路を終え地元・兵庫に帰省したとき、私は普段話している標準語から関西弁に切り替わる。そのたびに「言葉」について考えてしまう。

言葉はそれぞれの「文化」の大切な一部だと思う。言葉はその国や地域の人々の「生活」そのものだと思う。言葉が違えばすれ違いも生じる。標準語と方言が存在し、2つの間に問題が生じることもあるだろう。しかし、方言はそれぞれの地域に存在しなくてはならないものだと考える。

方言はある意味、その地域に住む人たちにとっての共通語だ。もし方言がなくなれば、当然その地域の雰囲気も標準的になってしまい、個性が失われてしまうだろう。大げさかもしれないが、日本全国で標準語が使われるのであれば、わざわざ都道府県や市町村に分ける必要はあまりないと思う。

私にとって、実家で標準語を話すのは敬語で話すのと同じくらい硬い感じになってしまう。同じコミュニティーに属していないのではないかとも思ってしま

う。それほど、方言は地方にとって大切なものだ。

場所が変われば方言は通じない。私が上京したころ、友人に「この本なおしてくれない？」とお願いすると「え、修理するの？」と言われた。ここでの「なおす」は「片付ける」という意味なのである。このような言葉のすれ違いが起きないためにも標準語はとても大切だと思う。

なぜか？ 単純に言えば日本全国どこでも通じる言葉だからだ。標準語を使うことはとても大切だ。他の場所に行っても方言を使っている人と標準語を使っている人ではイメージにも差が出てくると思う。

大事なことは、私たちが普段気付かず使っている言葉にもっと注目することだ。

私の故郷、加西市出身で史上最高齢の住職として100歳を過ぎても若い僧と修行を続けた故・宮崎^{えきほ}奕保さんがメディアの取材に「花はだれが見ていなくても咲いている」と言った。言葉も目立たないところで私たちの役に立っているのではないかと思う。